

「ハムレット」考

中島 關 爾

I

われわれが文學の第一義を暫く離れて、シェイクスピアの作品を観れば、彼の作品は完全な意味で、世界有数の所謂大衆文學である。彼の劇詩は 'caviare to the general'——高尙過ぎて俗受けせぬ逸品ではなく、'pleased the million'——大衆を歡ばせた。

しかし、それは世の所謂大衆にうつたへるだけではない。彼の「文學」は知性と教養の持主にもアッピールする。彼の時代以後、今日までの人心を掴むだけに止まらず、明日のあらゆる階層の人をも感動させずにかぬ生命の文學である。

斯様な「文學」は大自然と有情との甚深微妙、不可思議な交流、合一の結果である。炯眼な劇詩人シェイクスピアは大方の作家がなす如く、大衆の喜びさうな物語の創作とか、ある人物の考案に全精力を傾倒しない。既に民衆の間でいつとはなく評判されてゐるものゝ本質・生命を捉え、これを自家

「文學」の爐中に鍛錬し、光彩ある形を創り、彼の「文學」としてこれを萬代の民衆に贈る。

「ハムレット」もその例外ではなく、大自然と有情との靈妙な交流・合一に成る生命の文學である。シェイクスピアに言はせれば——……anything so overdone is (away) from the purpose of playing, whose end, both at the first and now, was and is, to hold, as 'twere, the mirror up to nature; to show virtue her own feature, scorn her own image, and the very age and body of the time his form and pressure,—The Tragedy of Hamlet, Act III, Scene I, 18-22 (何事もやり過ぎれば演劇の目的から離れる、演劇の目的は、昔も今も變りなく、謂はゞ大自然に向つて鏡をさし、人間の長所、侮蔑のまをそのまゝの形に、時代の本體に應じて、時代の形、印象のありのまゝを寫すにある。)

さて、現在の定本⁽³⁾「ハムレット」は一六〇四年版の第二、四つ折本及び一六二三年版の第一、二つ折本の二種を基礎に

校訂したものである。

シェイクスピアがその最初の劇詩 'Love's Labour's Lost' (戀の骨折損)——一五九〇年——を創る以前、ハムレットを主題とする古い劇——今はない——が存在して、民衆の間に人氣があつた。

この物語は一〇世紀のアイスランドの古文書中の神話にまで遡る。まとまつたハムレットの物語としては、一二世紀末葉、「學者の」サクソン (Saxo Grammaticus) が著したラテン文の「デンマーク史」第三—四卷 'Amlethus' がある。一五七〇年に出版された Bellforest: Histoire Tragiques は前者の自由佛譯で、更にそれが英譯され、一六〇八年に 'The History of Hamlet' の表題で刊行された。従つて、この最後の英譯本以外にハムレットを主題とする古い劇がシェイクスピア時代に存在してゐたことになる。それが天才劇詩人たる彼の目に一度ふれると、彼の「文學」の爐中に投ぜられ、鍛鍊されて、生命を與へられ、William Shakespeare: 'The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark' として上演され、'caviare to the general' ではなくて、大衆を歡ばせた——'pleased the million'.

前述の「學者の」サクソンの筆に成る「デンマーク史」第三—四卷のハムレット物語 'Amlethus'⁽⁵⁾ は基督教以前の極めて粗野、殺伐、陰慘な北方の匂ひのする古代サクソン文學であ

る。

定本の基礎資料の一つである第二、四つ折本の前年、一六〇三年に刊行された第一⁽⁶⁾、四つ折本は前者に比して人性の觀察、描寫、脚色、詞藻などの點からみてはるかに劣るが、これと獨逸本の「罰せられた兄殺し、又の名デンマークのハムレット王子」'Der Bestrafte Brudermord: oder Prinz Hamlet aus Dänemark' 及びキッドの「スペインの悲劇」'The Spanish Tragedy' を参照して今はない「古劇ハムレット」を推測すると、そのねらひは古いハムレット物語を借りて、復讐慘血劇 (the drama of blood) をつくり、大衆の喝采を狙ふ低俗なメロドラマ以上に出ない。

しかるにこの單なる復讐慘血劇に止つた「古劇ハムレット」を偉大な劇詩人シェイクスピアは換骨脱胎——古い布地を用ひて新しい衣裳の「ハムレット」を完成した。彼の藝術意識は亡靈、劇中劇、戀愛、佯狂、英國渡航、上覽試合等大衆の喜ぶあらゆる道具を驅使した。時には劇中の場面、人物の性格に矛盾、不調和が指摘されるにも拘らず、それらの矛盾、不調和は中世紀的なものとルネッサンスの持つ老成して、しかも若々しい「生命」の躍動と破調の美を構成してゐる。

われわれが主人公ハムレットから受ける印象は特に生き生きとして疊感的である。満堂の華かな衣裳の中に、黒一點の

喪服を着けて現はれる瞬間から「The rest is silence」⁽⁸⁾「餘は沈黙」の一語に終る大自然への歸一の場面まで、その變幻極りない光彩陸離の言動は興趣と強く、大きく、美しく、清らかな感動をわれわれに與へ、ハムレットを通して、われわれを詩心に目覺めしめ、大自然の大生命に目覺めさせる。

II

「ハムレット」の悲劇の原因を主人公ハムレットの性格に歸する諸説が從來なされてゐる。

(1) 外的困難

ヴェルダール(Werder)一派の説で、ハムレットが復讐しようとしても四圍の事情が許さぬための煩悶からだとする。これは第四幕第四場の第七獨白⁽⁹⁾に關してあるが、この最後の獨白は主人公の鈍つた復讐心に對する内發的な止むに止まれぬ自責心——四圍の事情が直接行動を禁制してゐる。沉んや彼の復讐は仇とする叔父クロードィアス王の命を取ればそれでよいのではない。「たが」がはづれて支離滅裂の頽廢した時勢を再び丈夫な礎に建て直すのが主人公の主要任務⁽¹⁰⁾であつてみれば、大義名分に立つて正々堂々と挑戦しなければならぬ。この自責心は——「忠臣藏」の大石藏之助が「赤穂城明渡し」の場であり——第五幕の實行に移つる前の戦略的迂回である。

(2) 内的困難

主人公が復讐を不道德だと思惟したゝめといふツルゲーニフ(Iwan Sergeyewich Turgenef)の主張。これは前述の自責心から否定される。

(3) 浪漫的感傷主義者の批評

ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)は「ヴィルヘルム・マイスターの修行時代」第四章第八節でかく批評してゐる。

「美しく、清く、高貴で、極めて道德的人物であるが英雄たるの氣力に缺けてゐるため、自ら背負ひ切れず、又投げすても出来ぬ重荷の下に倒れた⁽¹¹⁾」と。

しかし、主人公ハムレットがゲーテの云ふ如き人物であつたら、亡靈のあとを追つて、復讐を誓ひ、ポロニアスを刺殺したり、渡英の船中に於て國王の親書を書き變へ、海賊船に乗り移つたり、或は墓の中にとび込む程のことを敢てなし、遂に悲願を成就して、自らもレァティーズの毒刃に倒れ、淨福界に往生して、大自然の無限の生命に歸一することは思ひもよらぬところ。

(4) 反省説

シュレーゲル(August Wilhelm von Schlegel)やコールリッジ(Samuel Taylor Coleridge)によると、主人公は色々の目的に充ちてゐるが、目的に伴ふ心の性質を缺いてゐる

る。作者がわれわれに印象しようと思ふ眞理はかうだ。即ち活動が存在の主要目的である。智力の働きが如何に卓拔でも智力がわれわれの活動の邪魔になり、只考へてばかりゐて、有効に活動する時が過ぎて了ふなら、智力は價値あるものは考へられず、寧ろ智力のあることは不運と言ふべきだ。主人公にはその知的活動の過重から活動回避の性情があると。ダウデン教授 (Edward Dowden) やスィドニイ・リー (Sir Sidney Lee) も同様に、極端なハムレットの反省が悲劇の原因だと主張する。

だが、筆者をして言はしむれば、主人公の活動の核心は外部にあらはれる活動ではなくてむしろ、より深い思考、より内面的な魂のそれである。悲劇「ハムレット」はこの意味に於てシェイクスピアの偉大な作品であり、これを單に表にあらはれた事件の展開——本質を離れて現象の世界からのみ觀るとすれば、低俗なメロドラマに過ぎぬものとなり、エリザベス朝以來今日まで民衆に廣くアッピールし、更に今後の世界に古典としての生命を保つことは出来ない。

(5) ブラッドリイ教授の説

以上の諸説から進んで、ブラッドリイ教授 (Andrew Cecil Bradley) は次の如く論じてゐる。

「先づ、主人公の氣質が神經質な不安定性に傾いてゐて、感情、氣分が急激に、極端に變化し易い。所謂、mental sta-

bility を缺くため、楽しいにつけ、悲しいにつけ、彼をとらへた感情や氣分に當座は支配される。

次に廣義の道德的素質に富み、従て、彼の皮肉、罵倒もわれわれの心をひきつける。彼は好意を以て他に接し、罪惡に對して強い反感をもつてゐる。

更に、彼は反省的天才である。

これらの三つがハムレットをして悲劇への途を辿らしめた。十八世紀末に理想主義的運動が起るに至つて「ハムレット」はシェイクスピア劇詩中にユートロピクな地位を占め、これに匹敵するのはゲーテの「ファウスト」だけだと考へられた。それは主人公ハムレットがわれわれに靈魂の無限性を感じ得させ、しかもその無限性を限定するのみでなく、その結果たる悲運を、また、われわれの心に最も深く徹せしめたからだ⁽¹²⁾と。

もしハムレットが「オセロー」の中の旗手イアゴの如く良心の嘯きの力が弱い男であり、従て内省に缺け、道德的素質を有せぬ、唯我功利主義の行動派、人間相互の信頼なく、涙も微笑も解せぬ、人間味のない、たゞ鋭敏な理智と自己の利害をみぬく冷徹な頭腦の所有者であつたならば、悲劇の主人公とならなかつたであらう。

こゝでわれわれの銘記すべきは、シェイクスピアがハムレットを通して彼の人生觀・世界觀を、換言すれば彼の文學の

第一義を、われ〜に開顯してゐる次の事實。

Ham. There are more things in heaven and earth, Horatio,

Than drea⁽¹³⁾nt of in your philosophy.

ハムレット 「天地の中には様々なことがあつてね、ホレーシオ君等の哲學の夢想だに及ばぬことが多い」と。

これは無限・絶對の世界から有限の世界に人間の姿を與へられたわれわれが、その根本の無限・絶對の世界——無量無疆の自然、過去は無始に連り、未來は無終に連る大自然の生命に育まれ、存在してゐる事實。換言すれば、小さい有限のわれわれ人間の力を以てしては寸毫も變更し得ぬ廣大無邊な大自然の生命力——神佛の力が宇宙・娑婆世界に遍滿し、遍照してをり、われわれはその大自然の生命に目覺め、大自然に合一・歸一すべきであること。

されば「ハムレット」の主人公もルッネサンスの思潮の外にあるものではなく、作者の娑婆世界觀を肯定する——「The rest is silence」——來世は不可知のものとして、これをあげつらふことを止め、一切苦の渺たる一身を以て自己の使命感に徹し、急がず、あせらず、反省に反省を重ねて、使命——復讐・國家秩序の再建にひたすら精進し、終にクローディアスを倒し、フォーティンブラスを王嗣と定め、これをホレーシオに托して大自然に歸へり、淨福界に大往生して、無量壽を享受し、無量光に浴する。

III

シェークスピアのハムレットは威嚴と優雅と寛容を兼備した好青年であり、しかも武人である。勇氣があり、劍道にも秀で、肉體的に妄りに恐怖しない。しかし神經質で感情や氣分の變化が早く、感受性が鋭い。豊かな想像力を持ち、内省力が強い。

第三幕第一場（五五—六四）の獨白は主人公の性格をよく説明してゐる。

Ham. To be, or not to be; that is the question:

Whether 'tis nobler in the mind to suffer

The slings and arrows of outrageous fortune,

Or to take arms against a sea of troubles,

And by opposing end them? To die——to sleep——

No more; and by a sleep to say we end

The heart-ache and the thousand natural shocks

That flesh is heir to, 'tis a consummation

Devoutly to be wish'd. To die——to sleep——

ハムレット 「どちら（が大丈夫の志）であるか——それが問題だ。

ひたすら耐へ忍ぶが大丈夫の本意か
石火矢玉の残酷な運命を。

それとも武器をとつて海なす艱難を迎へうち、

鬪つてその根を斷つが男子の志か？ 死は——ねむり——

たゞそれだけのこと。死のねむりで

この身につきまふ、心の悩みを去り、

數多の苦惱が除かれるといふならば、それこそ此の上もな

い

願はしい大往生だ。死は——ねむり——⁽¹⁴⁾

ハムレットをして斯様に生死の問題について深く内省させたものは何か？ 父の亡靈に誓つた彼は生を此の娑婆世界にうけて約二〇年、父王横死の後、約四ヶ月に亙る魂の陣痛期を経て第二の誕生をした。

Ham. The time is out of joint;——O cursed spite,

That ever I was born to set it right!——⁽¹⁵⁾

ハムレット「世の中は關節ばなれで支離滅裂。えい、うるさい、面倒な。

抑々自分が生れてきたのはその世直しのためだ！」

この第一幕第一場のをちは主人公ハムレットの正義感から出た青年らしい勇氣にみちた覺悟——われ立つて世直し大明神たらんとの抱負のほどが偲ばれる。

意外千萬な事件の真相が、突如、父の亡靈によつて知らされた後——

Ghost. Revenge his foul and most unnatural murder.⁽¹⁶⁾

亡靈「叔父の極悪、非道の弑逆の仇をうて」と聞かされて、

Ham. Oh, horrible! Oh, horrible! Most horrible!⁽¹⁷⁾

ハムレット「あゝ、怖ろし、怖ろしや、なんたる怖ろしきこと」

斷腸の感慨をもらさざるを得ぬ主人公に對し、亡靈は更に

さとして曰く。

Ghost. If thou hast nature in thee, bear it not;⁽¹⁸⁾

亡靈「汝もし孝心あらば、この怨みを忍んではならぬ」と。

そこで彼が覺えず發した自重自制の句が、前述の覺悟、抱負の前提たる第二獨白。

Ham. Oh, fe! Hold, hold, my heart;

And you, my sinews, grow not instant old,

But bear me stiffy up.⁽¹⁹⁾

ハムレット「あゝ、おどまじや、耐へよ、たへよ、わが心、

亦、汝わが筋肉よ、俄かに老ひ行くことなく、われを強く支へよ」

これまさに勇士劍を擲して戰場に臨むかけ聲であり、自己の使命を自覺した主人公の叫び。

また決意の程を示して曰く。

Remember thee?

Yea, from the table of my memory

I'll wipe away all trivial fond records,

.....

And thy commandment all alone shall live
Within the book and volume of my brain,
Unmix'd with baser matter; yes, by heaven!⁽²¹⁾

「われを忘るなとや」

まことわが記憶の手帖より

一切の愚かしの記録を盡く拂拭して、

.....

御霊の嚴命たゞ一つを

わが頭腦の書卷に生かし、

他の卑しきことはまぎれず、いかにも天に誓つて」⁽²²⁾

そこでハムレットはクローディアスに向つて獨白宣言する

——〔Writing.〕

So, uncle, there you are.——Now to my word;

It is: "Adieu, adieu! remember me."⁽²¹⁾

I have sworn't.

「さあ、叔父上、この通り書いたぞ、今度はわが合言葉をかうだ——去らば、さらば、われを忘るな（と書きながら）自分は今もう天に誓つたのだ」と。

Hold, hold, my heart; (耐へよ、たへよ、わが心) と對蹠的なのが第一獨白である。父の急死後、二ヶ月を経過せぬのに母の再婚、父の急逝に對する漠然たる疑惑から二〇歳の青

年ハムレットが選ばんとした途は逃避——ウィットンベルト復學。しかもその望みは母のガートルードと叔父——新王クローディアスに阻止されて、煩悶、苦惱の宮廷生活は純情、無垢の彼を絶望の淵に追ひつめる——

Ham. O, that this too too solid flesh would melt,

Thaw, and resolve itself into a dew!

Or that the Everlasting had not fix'd

His cannon 'gainst self-slaughter! O God! O God!

.....

It is not, nor it cannot come to good;——

But break my heart, for I must hold my tongue!

ハムレット「あゝ、この餘りにも、餘りに硬い生身の溶けて、

とろけて、露と消したや。

さもなくば、不滅の神の掟さへなくば

自殺を禁じたまへる。あゝ神よ、神よ。

.....

よいことはない、又善いことの起る筈もなし、

わが胸も張り裂けよ、口をつぐまねばならぬ故」

悲痛極まる絶望の叫び。生死の巖頭に立つ主人公の苦惱。

けれども、既述の如く、真相の暴露はハムレットの内省、

自重を喚起し、I have sworn't. (自分は今もう天に誓つた)こ

とにより、彼の使命感は結晶し、彼の意志力は本來の健全な

活動を開始する。そして彼の第二の魂の誕生——The Time is out of joint;——O cursed spite, / That ever I was born to set it right!——(世の中は關節ばなれで支離滅裂。え、うるさう、面倒な。抑々自分が生れて来たのはその世直しのためだ!)更に To be or not to be; that is the question: (どうやらが大丈夫の志であるか——それが問題だ)——と云ふ内省に進み、第三幕第二場の劇中劇を通じてトロイデウス⁽²³⁾の偵察に成功——叔父は主人公の The Mouse-Trap⁽²³⁾(ねずみ落とし)にまんまとかゝる。ハムレットの縦横の⁽²⁴⁾機智と実行力はみごと the conscience of the king (王の良心)を捕くる——

Op. The king rises.

Ham. What, frightened with false fire!

Queen. How fares my lord?

Pol. Give o'er the play!

King. Give me some light!——Away!⁽²⁵⁾

オスマン「お上がおたちです」

ハムレット「え、うその砲音に驚いたな」

王妃「お上、如何なされましたか」

ホローヒンス「止めな、芝居を」

王「明燈をもて——退出じや」

一同退出。残るは主人公とホレーショの二人だけ。ハムレ

ットが親友にもらす胸中の感慨は——

Ham. Why, let the stricken deer go weep.

The hart ungalled play;

For some must watch, while some must sleep;

So runs the world away

Would not this, sir, and a forest of feathers——if the rest of fortunes turn Turk with me,——with two Provincial roses on my razed shoes, get me a fellowship in a cry of players, sir?

Hor. Half a share.

Ham. A whole one, I.

For thou dost know, O Damian dear,

This realm dismantled was

Of Jove himself; and now reigns here

A verv, very——pajock.⁽²⁶⁾

オスマン「なまじ、手負ひの雌鹿は行つて泣け、

無傷の牡鹿はたはむれる、

眠むるもあれば、寝入らぬも

人さまざまの世の中じや。

どうだ、君、もしこれと(派手な装束の)役者の一座があれば——今後、私の運命がひどく變れば、——プロローグのばらに型どつたりボンをつけた靴をはいて、役者の

仲間になれまいかね、君」

ホレシキ 「まづ半人分のわけまへですな」

ハムレット 「一人前の全額だよ、私は。

そのわけは君も知つてる、デーモン君、

この王國を奪はれたは

他ならぬジョーヴ王、代つて今の統治者は

まこと本當の——孔雀さま」

劇は進んで、第三幕第四場の實母ガートルードに對する毒舌のえぐりを経て第四幕第四場の最後の獨白——はづみを乗り越えて行く主人公の高邁な太つ腹、最も雄大、最も莊嚴な鈍つた復讐心に對する内發的な止むに止まれぬ自責心、人間の本質觀、自ら突入して行く實行生活上の各論、自己の使命とその達成能力の自覺から來る戰略的迂回の佳境に入る。

Ham. How all occasions do inform against me,

And spur my dull revenge! What is a man,

If his chief good and market of his time

Be but to sleep and feed? a beast, no more.

Sure, he that made us with such large discourse,

Looking before and after, gave us not

That capability and god-like reason

To fust in us unused. Now, whether it be

Bestial oblivion or some craven scruple

Of thinking too precisely on the event,——

A thought which, quarter'd, hath but one part wisdom

And ever three parts coward——I do not know

Why yet I live to say "This thing's to do,"

Sith I have cause, and will, and strength, and means,

To do⁽²⁷⁾.

ハムレット「何とすすべての出來事が自分の落度を密告、面責し、自分の鈍つた復讐心に拍車をかけることか! 人間の本質は何か?

もし人間の時を支配する商品價值ある私有物が

ねむつて、食ふ丈けのものならば、けだものにすぎぬ。

確かに神がわれ等を造つて、大きな推理力を與へ

わら等に前提を顧慮して結論に向はせる、

あの能力、神にも似た理性を賜はつたのは

われ等のうちに無用に歸させ、請びつかせんがためではな

かつた。さて、どちらだ、

畜生の如く忘れっぽいのか、それとも何か臆病な狐疑逡巡

なのか

ことを餘りに精密に考へることから、

即ちわが心を四分すれば、槃若の智慧は僅か四分の一で

あとの三つは常に卑怯なのか、自分にもわからぬのは

なぜ自分で、これ——大事——をなすべきだと言ひつゝ生

きてゐるかといふこと、

自分にはこれをなすべき

根據(使命)と意志と力と手段とがあるのに」

ハムレットの知的解剖力を以てしても、尙ほ解き得ない側面の存在に關する告白は「なぜ自分は生きてゐるか」ではなくて、「なぜ自分でこれをなすべきだと言ひつゝ生きてゐるか」である。當然なすべき大事を實行せず、それを口にしつゝ無爲に過す自責の念。しかしそれは公明正大な人間觀を背景としての自責の念。堂々天下に通用する大義名分を始め、四つの理由まである自責の念。外壓力ではなく、内發的自責の念。やむにやまれぬ心の奥底から發した自責の念。それと同時に外部から一大刺戟を與へたのがフォーティンプラスのポーランド遠征の壯舉。但しこれは一例で、斯様な刺戟を主人公はそれまでいろいろ受けたわけで、How all occasions do inform against me, / And spur my dull revenge! の獨白となつてゐる。

この内發的自責の念に外部の刺戟が加つて彼の理性が下した判斷は——

Rightly to be great

Is not to stir without great argument,

But greatly to find quarrel in a straw

When honour's at stake.

「正しく偉いといふことは

行動の立派な根據なしには動かぬことではなくて

わら程の些細なことにも争ひの立派な根據をみつつけることだ

こと名譽にかゝはる場合には」

こゝでデンマークの國土を通過するフォーティンプラスの率ゐるノーウェイ軍のポーランド遠征は彼の名譽にかゝはるところ。その根據は偉大で立派である。しかしその刺戟よりも、ハムレットは重臣ポロニアスを誤殺して、英國行きの王命を受けた以上、公私の別を先づ明かにせねばならぬ。Rightly to be great にとつて、當面の第一歩は迂回策をとり、一步退いて王命に従ふのが自己の名譽にかゝはるところ——と觀じた主人公が、年來の理想 Magnanimity = Nobility (高邁・高潔)を現下の立場に照しての自己省察は——

How stand I then,

That have a father kill'd, a mother stain'd,

Excitements of my reason and my blood,

And let all sleep, while to my shame I see

The imminent death of twenty thousand men,

That, for a fantasy and trick of fame

Go to their graves like beds, fight for a plot

Whereon the numbers cannot try the cause,

Which is not tomb enough and continent

To hide the slain? O, from this time forth,

My thoughts be bloody, or be nothing worth!⁽²⁹⁾

「それでは、自分の立場はどうか？」

父は殺害され、母は汚されて、

わが理性、わが情熱をふるひ起すものなのに、

しかもすべて(使命、意志、力、手段)をねむらせてゐ

る。之に反して、恥かしや、わが眼にうつるは

死地に赴く二萬の將兵、

彼等は名譽といふ幻と假面を得んと求め

墓に入ること寢所に行くが如く、寸尺の地を求めて戦ふも、

寸尺の地で兩軍それぞれの使命達成を試みることもかなはず

それは死者を隠す

だけの墓場にも足りぬ。おゝ、今日よりは、

わが心残忍なれ、さもなくば無價値なれ」

ハムレットのこの最後の獨白の解答は即刻復讐決行とあせ

りを感じてゐるのではない。彼の心底を壓してゐるのは無限

の痛恨——祈禱のため苦心中のクロードディアスを見逃したこ

とでなく——主人公が勝利に得意の場面に於けるポーニア

ス誤殺の失態。その當面の責任から、彼はやむなく王命に従

ひ英國に渡らうとする。この戦略的迂回の後、彼が直に實行

せんと覺悟したのが bloody revenge。渡英の駄賃とばかり、

遮二無二、王の居間に亂入すれば、かりにクロードディアスの

首級をあげ得ても——境遇の展開上禁制されてゐるから——

ハムレットの行動は理不盡な殿中刃傷の一こまに終るが必

定。大石藏之助の城明渡しから山科閑居への過程にも似た苦

心と同時に襍度豁達の場面。ここで主人公に残されてゐるの

は思想の世界だけで、My thoughts be bloody, or be no-

thing. worth—は至極當然な結びの言葉。浪漫的感傷主義

の批評家が見落してゐるのはこの點である。

さてオフィリアの死は、ハムレットのなげき、悲しみもそ

ることながら、却つて彼の決意に拍車をかけて、舞臺は最後

の場面に入る。

Queen. No, no, the drink, the drink——O my dear Hamlet

——

The drink, the drink!——I am poison'd.

Ham. O villainy!——Ho! let the door be lock'd!

Treachery! Seek it out! [Laertes falls.

Laer. It is here, Hamlet. Hamlet, thou art slain;

No medicine in the world can do thee good,

In thee there is not half an hour of life;

The treacherous instrument is in thy hand,

Unbated and envenom'd; the foul practice

Hath turn'd itself on me; lo, here I lie,

Never to rise again; Thy mother's poison'd;

I can no more,——the king,——the king's to blame. (38)

王妃「いゝ、いゝ、あの酒、あの酒、——(わがいとこの)ハムレットや——

あの酒、あの酒、——私は毒害されたぞき」

ハムレット「おゝ、大罪！　こら！　戸口をかためろ！

叛逆だ！　探し出せ！」(レエアティーズたほれる)

レエアティーズ「叛逆者はここにゐます、ハムレットさま、ハム

レットさま、あなたもやられたのです。

如何なる薬も用をなさず、

もう半時の命もありません。

叛逆の道具はあなたのお手にあるもの、

尖留もなく、毒を塗つてあります。この奸計は

已に還へつて來ました。ごらん下さい、ここに私も倒れ、

二度と起つこと叶ひません。母君様は毒殺されました。

もうこれ以上話す力もありません——王様——王様こそ罪

人です」

鳥のまさに死なんとするやその聲悲しく、人のまさに死な

んとする時、その言やよし。その瞑目前にレエアティーズの

表皮は一重二重とはがれて武人にふやほしへ、Why, as a

woodcock to mine own springe, Osric./I am justly kill'd

with mine own treachery.——Act V, Scene I, 293 (44)

「ハムレット」考(中 島)

に、わがわなに掛つた山しぎ同然、オズリック君、自分の犯した叛逆罪で殺されるのも當然正義の制裁だ」と自己の非行を認め、責任を十二分に引受け、真相を告白する。

ことごとくに至つてハムレットは——

Ham. The point envenom'd too!——

Then, venom, to thy work! [Stabs the King. (45)]

ハムレット「この尖端、それに毒まぜ！」

では、毒よ、汝の仕事を果せろ！」

と王を突き刺す。天の時、地の利。使命、意志、力、手段、

所、時のすべてがここに結集して主人公は宿志を果すが、自

らも毒及に倒れることになる。臨終に際し、レエアティーズ

が「ハムレット様、私と心からの赦しを交して下さる！」——

Exchange forgiveness with me, noble Hamlet; (Act V,

Scene III, 316)と言へば、「願くば天もそなたの罪を赦した

まはんことを！　やがて後を追ふぞ」——Heaven make thee

free of it! I follow thee. (319)と主人公はレエアティーズ

が黄泉の國への旅立ちに無上安堵の贖を贈る。そしてホル

ーシオに向ひかく遺言する——

Ham. O, I die, Horatio.

The potent poison quite o'erflows my spirit;

I cannot live to hear the news from England.

But I do prophesy the election lights

On Fortinbras; he has my dying voice;
So tell him, with the occurments, more and less,
Which have solicited.—The rest is silence.⁽³²⁾

ハムレット 「お、最後に来た、ホレーシオ、

あの激しい毒は私の氣力を悉く挫いてしまふ、
生きて英國よりのしらせを聞くことは叶はぬ。

そこで豫め遺言する、わが王嗣を

フォーティンブラスに定めると、これが彼への遺言。

彼にことの仔細を語つてくれ、

私が今日までしなければならなかつたことがらを。——余
は沈黙」

孤軍奮闘、幾多の辛酸を経て志いよいよ固く、内省に次ぐ
内省、使命感に徹して意志と力と手段を天の時、地の利に結
集した主人公ハムレット。復讐の誓ひを見事に果したが、自
らも毒刃に倒れ行くハムレット。もう半時の生命もない身で
「世の中は關節ばなれで支離滅裂。抑々自分が生れて来たの
はその世直しのためだ」との使命感に徹し、國家百年の前途を
圖る青年騎士ハムレット。作者シェークスピアが描いた主人
公はデンマークの史實よりも寧ろエリイザベス朝の騎士道精
神に據つたものである——Horatio, I am dead; Thou livest;
report me and my cause aright/To the unsatisfied.——
Act V, Scene II, 325-6 (ホレーシオ、もうこれきりだ、君

は生きながらして、私と私の使命を實情不明で不思議に思ふ
人々に傳へてくれ)とのハムレットの言葉に應じてホレーシ
オ答へて曰く。Never believe it./I am more an antique
Roman than a Dane;/Here's yet some liquor left—327-9
(生きながらへることなど思ひもありません。私はデンマー
ク人たるよりは寧ろ古へのローマ人になります。こゝにまだ
毒の酒が残つてゐます)と。エリイザベス朝の青年にとつて
理想の人物はローマの古武士。そこで筆者はかく言ひたい。
——作者が描いたハムレットは英國騎士道の華だと。されば
主人公はレアティーズが赦しの取り交しを乞ふや、神に彼
の罪の赦免を祈り、苦しい斷末魔に國家の秩序回復を遺言し、
「余は沈黙」と生死をあきらめて、従容として大自然に歸へ
つて行く。沈黙のうちに嚴肅な、證明を超越した光明世界へ。
苦なる現實、有限の世界から大自然の無限の世界へ。無量光、
無量壽の淨福界へ。

かくてシェークスピアの詩心を通じて描かれた「ハムレ
ット」はわれわれに生命の「文學」を與へ久遠の白光を放つ。

1' 2 First Play. What speech, my lord?

Ham. I heard thee speak me a speech once, but it was
never acted; or, if it was, not above once; for the play,
I remember, pleased not the million; 'twas caviare to the
general;……The Tragedy of Hamlet, Prince of Denmark,

Act I, Scene II, 413-6.

3 筆者がテキストを選んだ定本は次のオックスフォード版である。
4 The Complete Works of William Shakespeare, edited, with a glossary, by W. J. Craig, M. A., Trinity College, Dublin, Oxford University Press, London, 1914.

4 ティモステス 教師の「ホムレット」が「ティモ・キム」の作語「The Spanish Tragedy」の語句の「点」から彼がその作者であると推測する。……*The Spanish Tragedy*, by Thomas Kyd, who is also supposed to have written the first play on the Hamlet story. The outline of *The Spanish Tragedy* reveals its general character. Andrea, a Spanish nobleman, is sent to claim tribute from the king of Portugal. War arises and Andrea is slain. His friend Horatio captures the Portuguese prince, Belthazar, and returns to Spain. Here Horatio falls in love with Bel-Imperia, formerly the lady love of Andrea, and is beloved by her in return; but her brother Lorenzo, a court villain of the blacket stamp, wishing her to marry Belthazar, murders Horatio and hangs him to a tree in his father's garden. Here Hieronimo, the father, discovers the body of his son, and vows the rest of his life to vengeance upon the assassin. A play is devised at court in which Lorenzo and Belthazar take part. At the close Hieronimo and Bel-Imperia stab the two traitors and afterwards put an end to their own lives. (F. M. Tisdell: *A Brief Survey of English and Amer-*

ican Literature, N. Y., The MacMillan Company, 1927, p. 51).

5 「基督教の未だデンマークに入らざりし未開の頃、又英吉利が該國の所領たりし殺伐の時代に、デンマークの王は Roderick と云ふがあり、其の國土を分割して州となし、州司を置きづ之を管せしめたり。州司中に兄弟の者あり、兄を Horvendile 弟を Fengon と呼べり。海賊業は時の譽れなりしが Hor. は最も其道に秀でたりき。ノールウェーの王は Collere と云ふ者あり、Hor. の武名を嫉みて單騎格闘せんことを求む。應戦の結果 Col. 敗死し Hor. は敵の財寶滿船を得て歸國し、其の多くを國王ロベリックに獻ず。王嘉して其一女 Geruth を Hor. に嫁す。Hamlet は其の子なり。

Fengon 兄の名譽を妬みて亡きものにせんと欲し、先づ嫂を誘惑して弑逆を遂ぐ。(宴席に暗殺し、罪を臣下に嫁す、毒殺にはあらず)。Hamlet おのが身の危きを悟りて伴狂す。Fen. の黨與之を疑ひ Fen. に勸めて百方探偵せしむ。

官女中に Hamレットに戀慕せるものあり。Hamレットと育ちし一紳士翁に計畫を Hamレットに告げて警戒せしむ。Fen. 旅行すると偽りて林中に狩し、其不在中に妃と Hamレットとを一室に會談せしむ。顧問官某、室の垂帳の背に潛みて窺ふ。妃と Hamレット室に入來る。されど Hamレットは聊も油断せずして伴狂をつゞけ、頻に狂ひ廻り、手もて垂帳を拊ち試む。何物か動くを覺り、*arati arati* と叫びつゝ、劍にて顧問官を刺殺す。寸々に切りて煮て豚に食はしむることなどあり。かくて母を罵り責むる語頗る長し。密談數刻の後、母は弑逆には關係な

しと辯疎してハムレットに同心し、祕密を守り、復讐に助力すべしと約す。

Fen. はハムレットを英國に送らんとす。(密書の件、すりかへの件等、すべて沙翁が作の通りなり、只海賊船の一條だけはなし。)かくてハムレットは英國に渡り、Fen. の命と詐りて英の公主と婚し、やがて脱走す。時に本國にてはハムレットは既に死にたりと信じて葬儀を執行せる最中なり。ハムレット夜に乗じて Fen. が館に火を放ち、恰も酔臥せる近臣等を焚殺し、同時に Fen. が寢室に闖入し、名宣りかけて首と胸とを二分す。民衆は翌朝に至り焼跡に集り來り、頭足を異にせる Fen. を見て駭く。復讐を辯じて民衆を鎮撫するハムレットの長演説あり。……人民悦服してハムレットを國君と崇む。ハムレット再び英國に赴きて其の妻を具し歸らんとす。然るに英王に異圖ありてハムレットを殺さんと企つ。ハムレット逆まに英王を殺し二妃をえて歸國す。叔父に Wiglerus といふあり、野心を抱きてハムレットを襲ふ。第二の妃 Hermetrude 敵に内應してハムレットを弑し、Wig. に嫁す、云々。」——坪内雄藏「ハムレット」(早大出版部、昭和五年)の緒言。

6 一六〇三年版の第一、四つ折本は第二、四つ折本の三七一九行に對し、二一四三行しかなく、内容は拙劣で、シェークスピア獨得の名句少く、場面の排列が混雜してゐて、性格描寫も違つてゐる。

二本の關係についての首肯される臆説は次の如くであらう。所謂「古劇ハムレット」があつて、民衆の間に人氣があつた。シェークスピアがこの古劇の改訂に着手したのは大體一六〇一

年頃として、作者の満足する程度に改訂されたのは一六〇三年頃と推定される。後者の原稿によつて出版されたのが第二、四つ折本(一六〇四年版)で、第一、四つ折本(一六〇三年版)は作者自身不満足な改定途次の原稿が無斷盗刊されたものか。7 寫本としては一七一〇年のものが最も古い。初版は一七八一年、爾後數回刊行内容拙劣。一六世紀末、英國の喜劇役者が獨逸に持込んだ第一、四つ折本が獨譯されたものらしい。

8 Act V. Scene II, 345.

9 How all occasions do inform against me,

And spur my dull revenge!……(Act V, Scene N, 32-3)

10 The time is out of joint;——O cursed spite,

That ever I was born to set it right!——(Act I, Scene V, 189-190)

11 Ein schönes, reines, edles, höchst moralisches Wesen, ohne die sinnliche Stärke, die den Helden macht, geht unter einer Last zu Grunde, die es weder tragen noch abwerfen kann. (Wilhelm Meisters Lehrjahre).

12 A. C. Bradley: Shakespearean Tragedy, pp. 89-128, Macmillan, London, 1929.

13 Act I, Scene V, 165-7.

定本の your は第二、四つ折版によつたもの。第一、二つ折版が our となつてゐるのは興味がある。二語は發音が互ひに近く、綴りは Y 一字の差異。従てその意味はどちらにしても、複數所有格故、「君等の」「われわれの」といふエリイザベス朝では普通であつた氣輕な打とけた使ひ方。

この一節の解釋については筆者の「シェイクスピアの宗教」(駒澤大學研究紀要、通卷第一三號)に述べた如く浦口教授の見解に従ふ。that is the question: の句讀點は定本によればコロンである。市河博士の研究社版もコロンであるが、「あるべきか、あるまじきか、それが疑問」と譯し、主人公の煩悶は眞に生死の巖頭に立つたものゝそれであると斷じ、註には、以下ハムレットの第四獨白は劇中最も有名な箇所で、言々句々悉く人口に膾炙されてゐるとあり、序に於て、譯語に於ては坪内博士のそれに負ふ所尠くないとある。これが浦口教授を除く從來の解釋である。しかし原文がいつれもコロンである以上、しかも第一節の最後の the question と第二節の最後の (the question mark) の照應といふ原文の著しい工夫を併せ考へれば、To be or not to be (nobler): となく、To be (living) or not to be (living) = to live or to die と解すべきではない。補語の nobler は次行の Whether 'tis nobler のそれ。更にこれは次の主人公の死生觀展開によつても肯定される。「死は——ねむり——/たゞそれだけのこと/死のねむりで (by a sleep = by a kind of sleep = by a death-sleep) /この身につきまとい、心の悩みを去り/數多の苦惱が除かれるといふならば、それこそ此の上もない/願はしい大往生だ。死は——ねむり——」と。主人公にとつて死は單なる終りではなく、大自らの生命に合一するライフの總括りであり、永遠の生命に到達する途である。復讐と時勢の秩序回復の使命を托された主人公が軽々に實動に入るを止め、深く内省して、自己の死生觀を確立してゐる。こゝに及んで死ぬか生きるかと苦悶する人物なら

ば、秩序回復といふ使命感に徹することも、亡靈に復讐を誓ふことも、更に渺たる一身を以て千辛萬苦に耐へ、遂に大事を成就して、淨福界に往生することは思ひもよらぬ。

15 Act I, Scene V, 189-90. *in spite* は後期近代英語の personal spite = malice (惡因縁、呪はれた運命) の意味ではなく、*envious*。ちえい、面倒な。) *curse* はちえいこれを強く形容して、*resentment* を強くあらはし、全文の意味は青年ハムレットの正義感のせい。What a deadly bore it is that ever I was born to put the disjointed time into its proper joint!

16 Act I, Scene V, 25. *unnatural* is against the human nature の意。

17 Act I, Scene V, 80.

18 Act I, Scene V, 81.

19 Act I, Scene V, 93-5.

20 Act I, Scene V, 97-9, 102-4.

21 Act I, Scene V, 109-12.

22 Act I, Scene II, 129-32, 157-8.

23 Act III, Scene II, 227 劇中劇をハムレットは自ら稱してかく「わぢみ落し」といふ。次参照。

24 I'll have grounds/More relative than this.

The play's the thing/Wherein I'll catch the conscience of the king. (Act II, Scene II, 580-1)

「私が得たいのは/これよりもっと確かな根據だ。/芝居がそれだ。/その中で私が捕へたいのは王の良心」

第一幕の幕落ちと第二幕の幕あきとの間隔は約二ヶ月。この間、主人公には三重の苦心があつた。オフィリアに對する當面の處置。宮廷に對する當面の態度。胸中の新使命感についての具體的立證。第二幕第一場は第一の解決に對するハムレットの慎重でしかも男性的實行を描き、第二場の前半ではポロニアスの早合點を利用して、宮廷に於ける詐狂政策の實行。第二場後半に彼が到達したのが復讐の正當さに於ける具體的立證の具體案。(relative=conclusive, this=this ground=message of the spirit)

劇中劇——「ねずみ落し」に陥れて主人公が自分の手で捕へようとしたのは王の良心。新使命感は既に胸中に結晶してゐたが、當の相手たるクロロディアスに泥を吐かせる方法如何が最後の一點で、その解決、即ち *The play's the thing / Wherein I'll catch the conscience of the king* と云ふ具體案からハムレットが踏み込むのが第三幕の偵察行動。その主眼は王の良心を生捕ること。レアティーズ的復讐——時と所をえらばず相手を倒すことではない。

25 Act III, Scene II, 253-7 *false fire=a blank discharge of firearms*——空砲一發、王は突然の退場の口實を消化不良の目まひ(グイルデンスターンの言葉、二八八、二九〇)に歸してゐるが、このごまかしに掛からなかつたのは主人公とホレーシオだけ。クロロディアス王は今やハムレットが自分の祕密の罪を知つてゐることに氣附くが、どうして知れたかは未だわからぬ。とにかく王はこの瞬間から主人公を目して自分の決然たる敵とする。

26 Act III, Scene II, 259-72. *the hart (being) ungalled (will) play.* または *Let the hart ungalled play.* this (specimen of play writing). 脚本のひな形。

a forest of feathers=a band of players. ショークスピア時代、役者の舞臺衣裳は相當派手になつてゐて、清教徒がその派手な衣裳に反對してゐる。たとへば鳥の羽毛を澤山身につけて舞臺に出たところから *a forest of feather* は役者の一座をたとへた言葉。ただしその頭字押韻の F.F. は味ふべき所。

turn Turk も同様で、その意味は *to change completely, as from a Christian to an infidel (a Turk)*——クリステイアンがトルコ人の如き異教徒になる如く、完全に變ること。も一つの連想から云へば、當時ヨーロッパの芝居ではトルコ人はかぶとの頂きに羽毛飾りを附けて出ることになつてゐた。with *two Provincial roses* は文法上、*a forest of feathers* を形容してゐる。

プロローヴァンスは當時、ばらの名産地で、そのばらに型どつて結んだりボンの *rosettes* (ばら飾り) を役者が舞臺に出る時は靴につけてゐた。

razed=streaked in patterns で、當時の役者のはいた派手な靴の型。

a cry=a company は元來、*a pack of hounds* (一群の獵犬) をさし、恐らく獵犬と役者とはどちらもよく吠へるところから、面白く役者の仲間をかくいつたもの。

Half a share 當時の役者は一定の給料がなく、芝居の度毎にその収入をわけて配當された。若干の *shares* を劇場の持主

が取り、役者は各自の地位によつて、share 一つ、またはそれ以上乃至何分の一かを配當された。ホレーシオは冗談のつもりで「あなたの貰ひは半人分のわけまへだ」といつたのに對し、主人公は「なに、私はちゃんと一人前だ」とやり返してゐる。デューモンとピュニアスは西曆前四世紀初頭、スイシイリヤ島南部の都ヌイラキエースに名高い刎頸の友。ハムレットがホレーシオをデューモンにたどつたのは二友比較の結果ではなく、寧ろ O Damon dear, の頭字押韻 D-d. の口調から、Damon と Pythias と同じく主人公とホレーシオの所謂管仲鮑叔の交はりたたとしたわけのこと。

This realm (of Denmark) was dismantled (=robbed a king who had the majesty) of Jove himself.

pajock 或 peacack の訛りだとの説が多いが、孔雀とクローヂニアスとの性質類似からだとの説は穿ちすぎたせんせいで、寓話には eagle の代りに peacock を王としたものがある。

二七一行の was との押韻上考へられるのは ass (愚かな王) である。しかし作者シェークスピアの機智は主人公ハムレットの才智縦横振りを描かうと、大方の豫想をひらりとかはして、pajock と寓意に出た點、まことに作者の非凡な手腕を示してゐる。

27 Act V, Scene V, 32-46.

inform against=communicate by way of accusation (自分の落度を自分自身に密告する——鈍った復讐心に對する自責の念)

good and market 或 hendiadys (重言法=形容詞十名詞の

代りに二つの名詞を and で結んで表はす法) の一例で、その意味は good of market=marketable good (商品價值のなる私有物)

Be but to sleep and feed? (=is nothing but sleeping and eating)? (he is) a beast, (and) no more (than that).

he that made us=the Maker of Men 主人公よればわれわれが各自の心で授與せられたる最大の資性は such large discourse=such large and comprehensive faculty of reason=that capability and god-like reason.

Looking before and after=and when we exercise that faculty of reason, we look back to premises and forward to conclusions.

That capability and god-like reason=that capability of god-like reason=virtually, that capability or that god-like reason (U O and 或 hendiadys のやれ)

To fust (=to grow mouldy) in us unused. (U O 神から與へられた理性をわれわれのうちにたかひかせ、無用に歸せしむるのには天意を空にするにやせぬ)

Now, whether it be O it 或 Why yet I live to say "This thing's to do," O anticipative pronoun 或 然。今、Now, whether it be/Bestial oblivion or some craven scruple 或 Now, whether it be because of bestial oblivion or some craven scruple の意。

thinking too precisely on the event 或 A thought which, (when it is) quarter'd, hath (in) but one part wisdom

and (is) ever (in its) three parts coward の同格。

“This thing's to do,” = “This revenge is to be done,” (この

れは能動態の不定詞が受動態の不定詞に代用された普通の例)

cause を「原因」若くは「理由」と解しては原語に含まれて

ゐる客観性が十分にあらざるを得ない。獨逸譯の Grund に當

る ground の意味に解すべきは「根據」或は「立場」となる。

浦口教授によるハントレットには「使命感」があつた。一方に

於ては國家政治の正義化、他方に於ては夫婦愛の純潔化、こ

が彼の復讐心の動力たる cause であつた」と。(Prof. B. Ura-

guchi: Shakespeare's Hamlet as seen by the Elizabethan

Audience, p. 113. The Sansendo's, 1932)

斯様に解釋すれば cause = 根據 = 立場 = 使命 (感)。

Sith = sithence = since

To do't. = to revenge せ cause, and will, and strength,

and means, の各々を屬しての事。

28 Act W, Scene W, 53-6.

Rightly to be great = magnanimity = great-mindedness と

の区別せ Is not to stir without great argument (= Is not

to resent without great cause for movement), / But (it is)

greatly to find quarrel in a straw (= But it is to find a

great cause of dispute even in a trifle) / When (one's) hon-

our (is) at the stake.

at the stake = at stake

29 Act W, Scene W, 56-66.

my blood = my passion

And (how stand I then, that) let all sleep?

trick = mask

Go to their graves like beds, = Go to their graves as if

to their beds,

(and) fight for a plot (of ground)

whereon = on which plot of ground

the numbers = the opposing armies

the cause (兩軍をたゞむるの使命)

continent = that which holds or contains

(Let) my thoughts be bloody.

30 Act V, Scene II, 296-307.

O my dear Hamlet, (母の心の奥底から吐きださるる) 實に

くやハントレットの最後のおもむき

Treachry! 主入交の心の底から應じしハントレットに

くやハントレットの毒謀の心算の事

Seek it out! = Seek out the treachery of poisoning the

Queen.

In thee there is not half an hour of life (left);

Unbated = With no button on it

the foul practice = the foul plot

I can (speak) no more,

31 Act V, Scene II, 308-9.

Then, venom, (I shall deliver the King) to thy work! =

Then, venom, set thyself to thy work!

32 Act V, Scene II, 339-45.

Overcrows my spirit;=overcomes my vitality;
the news (about Rosencrantz and Guildenstern) from
England (=from the English King).
the election=the choice (of the new Danish king)
occurents=occurrences
more and less=both the more and the less important
occurrences
have solicited (me to act as I have done).